

早生系タマネギF1037の特性

砂川喜信・小禄博明¹⁾

(県農研センター宮古島支所, ¹⁾県農研センター)

はじめに

現在の主流品種である F50 は他品種より品質面で優れているが、分球率が高い欠点がある。分球したタマネギは単価が安く、収益低下の主要因であるため、F50 に変わる早生系で分球率の低い品種の選抜試験を実施し、選抜した優良品種・系統の栽培特性等を明らかにした。

材料及び方法

1)栽培試験

1)栽培概要

(1)供試品種 F-50 (対照), F1037 (2)播種・定植: 9月下旬・11月上旬

(3)栽培様式: 畦幅 160cm 株間 12cm 条間 14cm 4条 機械植

(4)施肥: N: 19.8kg, P₂O₅: 31kg K₂O: 18.8kg 牛糞堆肥: 3,000kg

2)食味官能試験

F50 と F1037 の 2 品種で、臭み・甘み・辛み・食感・総合の 5 項目を下表にそって 5 段階評価したたものを、点数に換算して合計点で比較。調査人数: 28 名

調査項目	評価方法
臭み・甘み・辛み	かなりある(5点)~ほとんど無い(1点)の5段階
食感	かなり良い(5点)~悪い(1点)の5段階
総合	おいしい(5点)~おいしくない(1点)の5段階

3)種子発芽試験

(1)試験1: シャーレでの発芽試験(インキュベーター使用)

F50 と F1037 のコーティング種子使用し、種子径以上の根の伸長を発芽の基準とした。

(2)試験2: 発芽揃い試験(インキュベーター使用)

F1037 コーティング種子: 288 穴トレイ・与作培土を使用(農家慣行)

結果及び考察

F1037 の 3 年間の分球率は、年による変動はあるものの F50 と比較してかなり低い(表 1)。また、F1037 の 3 年間の商品化収量(分球除く)は、F50 より常に高く、反収 4 トン以上で推移した(図 1)。

F1037 の規格別割合は、F50 と比較して 2 L 球以上が多く、大玉系統である(図 2)。

感応試験の結果、F1037 は、F50 と比較して、わずかに辛みが強いが、臭み・甘み・食感等には差はなく、総合的には同等である(表 3)。

発芽率は F1037 及び F50 どちらも同じ傾向で、温度が 20 ~ 30 の範囲においては、温度が高いほど発芽率が悪くなった(表)。

以上のことより、優良系統 F1037 の分球率は非常に低く、大玉系統であることから、分球率の低下と増収により、所得向上につながる可能性が高い。さらに、発芽適温が分かった

ことから，早期播種による出荷の前進化の可能性が高まった．

[具体的データ]

表1、3年間のF50とF1037の分球率の比較 単位:%

	H14	H15	H16
F50	23.3	24.0	72.9
F1037	2.8	0.0	16.7

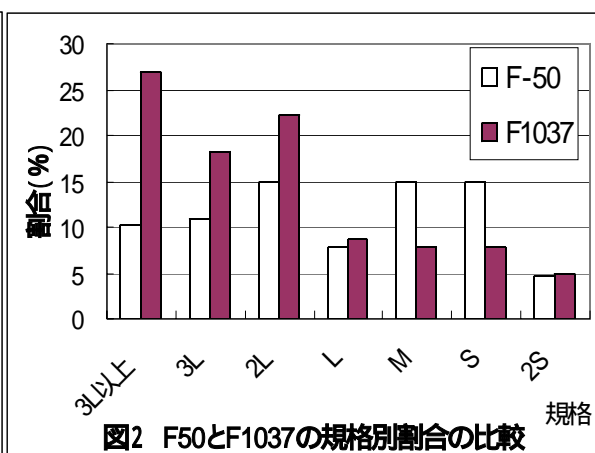
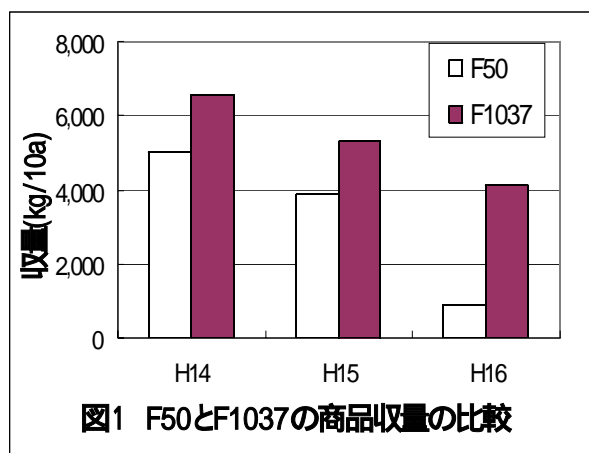


表2 食味感応試験結果

	臭み	甘み	辛み	食感	総合
F50	78	96	86	97	99
F1037	84	103	106	96	92
	ns	ns	*	ns	ns

* p < 0.05 Mann-WhitneyのU検定

表3、温度が種子発芽に与える影響

発芽率	20	25	30
	%	%	%
F1037	94	88	12
F50	88	85	43
試験日	平成17年10月14日~17日		

